

美術科教育学会通信 No.114

2023年10月20日

□巻頭言 □第46回弘前大会案内（第二次案内） □理事会報告 □新刊案内 □本部事務局より

巻頭言 Introduction

弘前へ行こう Let's get together in HIROSAKI

代表理事 直江俊雄（筑波大学）

Representative Director: Toshio NAOE, University of Tsukuba



© Kaori NAOE

1. 弘前大会を応援しよう

(1) 大会実行委員会を応援しよう

3ページからの「第46回弘前大会案内」にある通り、いよいよ対面での学会大会が2024年3月2日（土）、3日（日）、青森県の弘前大学で開催されます。遠方からの参加となる場合が多いと思いますが、ぜひ会場に集い、直接対話での研究交流の復活を祝いましょう。

この大会では、数年ぶりの対面開催というだけでなく、次の①から④の面で改革が導入されます。

① 3月下旬に開催されることの多かった大会日程を、会員アンケートなどの検討を経て、3月初旬に設定

年度末は異動などがあり学校勤務の会員の参加が難しいという声に対し、昨年秋の理事会から開催大学とも協議を続け、3月初めの開催決定に至りました。もちろん、全ての人に都合のよい日程はあり得ませんが、これまでの日程ではなかなか参加できなかった皆さんも、ぜひ大会の場を味わってみてください（ただし、会場校の都合がありますので、今後の大会も毎回3月初旬に開催できるとは限りません）。

② 筆頭発表者のみが会員であれば共同発表が可能に

これまで、発表者の半数以上が会員でなければ発表できませんでしたが、今年9月の理事会決定により、筆頭者のみが会員であれば発表資格を認めることになりました（本通信の「理事会報告」を参照）。これにより、これまでよりも多様な研究者との共同研究の促進が期待されます。

これまで他分野の専門家や未入会の仲間と研究を進めてきた皆さん、あるはこれから新しい仲間と呼びかけて共同研究を計画したいと考えている皆さんには、

ぜひ活用していただきたい規程改革です。より多様な研究の可能性が交差する場として、学会大会を活かしていきましょう。

③ 国際大会の日常化への一歩

本学会の近未来への改革として、学会大会を常時、国際大会として位置づけること、またそれが過大な負担や緊張を担当者に強いるものではなく、当たり前になることを目指したいと考えています。

具体的には、

[1] 毎回、海外からの講演者を招くこと

[2] 研究発表で英語の使用を認めること

により、常に海外からの研究者が参加する環境を用意し、国際的な研究交流を誰にでも近づける機会へと、大会を変えていくことです。

[1]については、弘前大会に国際美術教育学会（InSEA）会長を招くことが決定しましたので、今回、第一歩を踏み出すことができるでしょう。

[2]については弘前大会での実現はできませんが、国際局を中心に検討し、近い将来での導入を目指したいと思います。

④ 全国ネットワークの大会実行委員会

開催大学単独では十分な実行委員会の布陣を揃えられない場合もあります。今回、対面の大会開催としては珍しく、4名の実行委員が全て異なる大学所属で、しかも同じ地域ではなく全国に散らばる形で連携を組み、運営に当たってくださることになりました。新しい形での運営に果敢に取り組んでくださっている実行委員の皆さんに、心より御礼申し上げます。

実行委員会への応援の意味も込めて、私から少々メ

ンバー紹介をさせていただきます。

大会実行委員長の佐藤絵里子さん(弘前大学准教授)は、アメリカの美術教育評価論に関する研究で博士号を取得、保育者養成に関する論文で本学会の第16回『美術教育学』賞(2018年度)を受賞、近年は造形遊びに関する研究でも新たな視点を提起しておられます。昨年度の弘前大学着任早々、初の青森での大会開催を引き受けてくださいました。

大島賢一さん(信州大学助教)もまた、アメリカの美術教育に関する研究で博士号を取得、長野県の美術教育史研究にも取り組まれ、その研究テーマで第15回『美術教育学』賞(2017年度)を受賞されました。

山下暁子さん(青山学院大学准教授)は、教育人間学の研究で博士号を取得、風景と自己、美術教育における否定的なもの、教員養成の実践研究などに取り組んでおられます。

吉田奈穂子さん(筑波大学助教)は、シュタイナー学校の造形教育に関する研究で博士号を取得、芸術とウェルビーイング、芸術支援研究にも取り組んでおられます。

この4名の実行委員の皆さんは、本学会で昨年度大きな注目を集めた、造形遊びに関するリサーチフォーラム(学会通信113号参照)を3回連続で開催くださったメンバーでもあります。弘前大会でも、大会実行委員企画などをはじめとして、新しい発想で今後の美術教育研究を切り拓く場を作り上げてくださることでしょう。

理事をはじめとして、我々会員は、この若手研究者たちによる取り組みを、心より応援していきたいと思えます。また、大会実行委員会から何か頼まれたり相談されたりした際には、ぜひご協力やご助言等をお願いいたします。

(2) グレン・クーツ InSEA 会長に会おう

弘前大会でのInSEA会長講演は、大会実行委員会に負担をかけないため、大会実行委員企画とは別に、主に国際局の担当する事業として開催します。

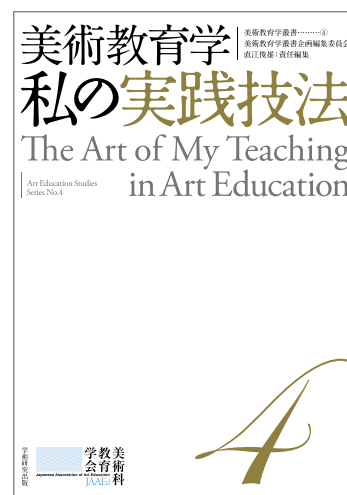
グレン・クーツ氏(フィンランド・ラップランド大学教授)は、イギリス・スコットランド出身で、2019年よりInSEA会長を務めておられます。InSEAによる「芸術による学習叢書」の創刊号『芸術による学習：21世紀への教訓?』(*Learning Through Art: Lessons for the 21st Century?*) (2019)の編者として世界の多彩な著者による同書を刊行に導きました。InSEA設立にも関わるハーバート・リードの『芸術による教育』の思想を現代において再検討するもので、私も「有機的多層芸術論：リードと美術教育者たちとの対話」と題する一章を寄せ、その中で私たちの美術科教育学会誌に掲載された多様な論文を紹介しつつ、現代の研究者たちの芸術観に言及しました。

今回は、科学研究費補助金「アートベースドヒューマニティ(芸術による人間性尊重社会の醸成)を志向するアートライティング教育のための基盤的研究」(代表：直江)の研究協力者として同氏を招聘します。

美術科教育学会は山木前代表理事と中村理事(国際局長)のご尽力により、2020年よりInSEA加盟団体として活動しています。今回の講演により、InSEAと日本の美術教育研究者との距離を一層近づける契機になるでしょう。

クーツ氏は2008年に大阪で開かれたInSEA世界大会以来の来日ということで、日本の美術教育研究の活発な状況を見るのを楽しみにしているとのことでした。

2. 美術教育学叢書第4号、間もなく刊行です



昨年刊行の第3号『美術教育学 私の研究技法』に続き、第4号『美術教育学 私の実践技法』が間もなく刊行されます。秋田喜代美学習院大学教授の特別寄稿、本学会の執筆陣による多彩な実践技法論、そして海外教育者インタビューには、グレン・クーツ InSEA 会長も登場します。3月の弘前大会では、同書の現物を手に取って見られるでしょう。

3. 理事の活躍など

現理事会(2022年～)では、4名の新理事が誕生しました。郡司明子理事には、相田副代表理事と連携を取った迅速対応による滞りなき会計で学会運営を支えていただいています。手塚千尋理事は、毎回驚くような秒速対応で、学会ウェブサイトの更新と維持にご尽力いただいています。藤井康子理事には、本学会通信の編集発行を、いつも用意周到に着実に進めていただいています。池田吏志理事には、学会誌編集以外にも教科教育学コンソーシアムの共同研究メンバーとしてご尽力いただいています。

現理事会は21名のメンバーで運営しておりますが、その活躍の様子等を会員の皆様に一層お伝えするため、次回学会通信より代表・副代表以外の理事にも交代で記事を執筆していただく予定です。お楽しみに。

4. お約束の件など

私ごとですが、学会通信110号でお約束した本学会誌への投稿はまだできておりません。次の号には皆さん一緒に出しましょう。

第46回弘前大会案内（第二次案内）

Notice of the 46th Conference in Hirosaki : Details about the Conference

第46回美術科教育学会弘前大会

大会実行委員長 佐藤絵里子（弘前大学）

第46回美術科教育学会 弘前大会 令和6（2024）年3月2日（土）・3（日）

大会テーマ「教室から通路をひらく／そのかたち、その先にあるもの」

ようやく猛暑が過ぎ、銀杏の色づく季節となりました。岩木山周辺では、たわわに実ったりんご畑が広がり、稲の間からときおり鷺が姿を覗かせています。さて、弘前大会は対面開催で行います。心配事を数え始めるとキリがありませんが、多少のことは大丈夫、それよりも今年は直接人に会える、互いの無事や健闘を祝したい、という気分が高まっているようです。

大会テーマ「教室から通路をひらく／そのかたち、その先にあるもの」は、今回ご登壇いただく予定のアーティストの鴻池朋子さん、青森県立美術館学芸員の奥脇嵩大さんとの対話を通して浮かんできた言葉です。当初、社会的な関係や仕組みを連想させる別の案を掲げていましたが、お二人との対話は、いつしか様々な意味を帯びた「逃走（エスケープ）」や「小径」の話になり、「学校の教室とその外部との間に通路を開いていただけませんか」というアーティストへの依頼の言葉となりました。「あそこまで行けば、違う景色が見えるかも」と子どもや先生を誘う小径、それは教室に新鮮な空気を届ける通路でもありますが、そこから新しく身軽な美術教育のイメージが湧いてきます。

本大会では、AIには再現できない応答や、断続的に続くゆるやかな時間が導く方向を大切にしています。「どこかからやってきて、あなたやわたしを捉え、ここで徐々にかたちをとりつつあるもの」の後をついていく感覚といえ伝わるでしょうか。大会テーマの決定と前後して、二つの実行委員会企画も動きだし、現在進行形のものばかりで次の展開が予想できません。

青森県には青森県立美術館、青森公立大学国際芸術センター青森、弘前れんが倉庫美術館、八戸美術館、十和田市現代美術館という、それぞれに特色のある五つの美術館・センターがあります。ほかにも、棟方志功記念館（2024年3月31日閉館）、寺山修司記念館、世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」に含まれる三内丸山遺跡、各地のねふた関連施設などがあります。金木の太宰治の生家や津軽鉄道のストーブ列車も情緒があってお勧めです。弘前大学文京キャンパスには、本学資料館の旧制弘前高等学校在学中の太宰治直筆ノートや、現在カフェとして活用されている旧制弘前高校外国人宣教師館（国の有形登録文化財）が残されています。

本会は実行委員の大半が関東甲信越を本拠地としており、大学や地域を超えた前例の少ない体制で運営しております。様々な背景や価値観の関係者が弘前に集まります。そのなかで、どうすれば周縁的なコミュニティの自治、固有の特色、そして多様性を尊重することができるのでしょうか。そしてどうすれば、見えない断層の向こう側にいる他者と、非対称ではない関係を築くことができるのでしょうか。

それでは、弘前大会への多くの方々のご参加と研究発表のご登録を心よりお待ちしております。

第46回美術科教育学会弘前大会 実行委員長 佐藤絵里子（弘前大学）
実行委員 大島賢一（信州大学）
山下暁子（青山学院大学）
吉田奈穂子（筑波大学）

- 主催 美術科教育学会
- 会期 令和6（2024）年3月2日（土）・3日（日）
- 会場 弘前大会文京キャンパス 教育学部棟、50周年記念館
- 理事会・総会 未定
- 後援（予定） 青森県教育委員会、弘前市教育委員会、五所川原市教育委員会、弘前大学

■参加費

	学会		懇親会	
	事前申込	当日受付	事前申込	当日受付
支払い方法	Peatix で清算	現金払	Peatix で清算	現金払
正会員*	4,500 円	5,000 円	6,000 円	6,500 円
非会員	5,500 円	6,000 円	6,000 円	6,500 円
学生会員***	2,500 円	3,000 円	4,500 円	5,000 円

*「大学美術教育学会」又は「日本美術教育学会」の会員は本学会会員と同様に、正会員の料金で参加できます。

***「学生会員」は、本学会に「学生会員」として登録済みの会員のことを指しています。なお「学生会員」に該当している方は、在職の有無は問わず、「学生会員」の料金でご参加いただけます。それ以外の学部生・大学院生、聴講生、研究生、科目等履修生は「正会員」「非会員」のどちらか該当する方でのご参加となります。

弘前大会では、上記の他に、3月2日（土）の午後に50周年記念館で開催されるイベントを対象に、非学会員のみが購入できる「限定チケット」を販売します（先着順あるいは抽選になる可能性あり）。

■参加登録・演題登録（口頭発表申込）の開始について

弘前大会 web サイトは、オープン次第、美術科教育学会の HP（<https://www.artedu.jp>）にて URL を周知します。希望される方は、第46回美術科教育学会弘前大会 web サイトへアクセスし、参加登録・演題登録をしてください。参加登録・演題登録の開始は、**2023年12月1日（金）**です。

■参加申込種別および申込方法

- ・学会の全体に関わる参加申込種別は、①大会参加申込、②演題登録（口頭発表申込）、③懇親会申込の三種類です。
- ・①大会参加申込と③懇親会申込は弘前大会 web サイトから、Peatix へのリンク先をクリックして、Peatix の画面上で申込と支払いを行なってください。クレジットカード払、コンビニ払、ATM 払に対応可能です。領収書を発行します。②演題登録（口頭発表申込）は、**①大会参加申込の手続きが済んだ後**、弘前大会 web サイトから、登録フォームへのリンク先をクリックして、登録フォームの画面上から行なってください。

■演題登録（口頭発表申込）の注意点

- ・②演題登録をされる方は、申込時に①大会参加申込で納金手続きが完了した際に画面表示される番号が必要となります。前もって①の申込を済ませ、発行された番号を記録しておいてください。
- ・②の演題登録（口頭発表申込）の手続き完了時に、概要集の原稿の形式や送付先、送付方法をお伝えします。
- ・本大会での事前申込は原則として Peatix 払での対応をお願い致します。どうしても難しい場合は、当日払いを検討するか、個別にお問い合わせください。

■大会までのスケジュール

会期が早まった分、例年よりも締め切りを早めに設定しております。また、コンビニ/ATM 払の Peatix での購入申込期限はその他の支払い方法とは異なります。詳しくは Peatix の大会ページでお知らせします。

（1）発表者のスケジュール

参加登録期間（参加費納入期間）	2023年12月1日（金）～2024年1月5日（金）
演題登録期間	2023年12月1日（金）～2024年1月5日（金）
発表概要集原稿 提出期間	2023年12月1日（金）～2024年1月21日（日）
大会 web サイト発表スケジュールの公開	2024年1月23日（火）（予定）

（2）参加者のスケジュール

参加登録期間（参加費納入期間）	2023年12月1日（金）～2024年2月23日（金）
大会 web サイト発表スケジュールの公開	2024年1月23日（火）（予定）

■大会日程（暫定版）

【1日目】2024年3月2日（土）9:30～17:50

9:30～11:45	口頭研究発表 ①9:30～10:00 ②10:05～10:35 ③10:40～11:10 ④11:15～11:45	教育学部棟
11:45～12:30	～昼休憩～	
12:30～12:40	開会式	50周年記念館
12:40～15:00	鴻池朋子さん（現代アーティスト）、奥脇嵩大さん（青森県立美術館学芸員）による「シンポジウム 新しい先生は毎回生まれる」	
15:10～16:10	InSEA 会長講演（国際局事業）	
16:20～17:50	研究部会	教育学部棟
18:30～20:30	懇親会・表彰式 18:30 受付 19:00 開始	アートホテル弘前シティ

※3月2日（土）は、本学資料館（教育学部棟内）の一角で五所川原市教育委員会、弘前大学教育学部附属中学校と連携した教育版画関係の資料展示を予定しています（無料）。

【2日目】2024年3月3日（日）9:30～17:00

9:30～11:45	口頭研究発表 ①9:30～10:00 ②10:05～10:35 ③10:40～11:10 ④11:15～11:45	教育学部棟
11:45～12:30	～昼休憩～	
12:30～14:00	実行委員企画① 登壇予定：高松智行さん （横須賀市立明浜小学校ことばの教室、カマクラ図工室代表）、 八嶋孝幸さん（弘前大学教育学部附属小学校） 実行委員企画② 登壇予定：内田裕子さん（埼玉大学）、 若松大輔さん（弘前大学大学院）	教育学部棟 1F 大講義室 2F 大講義室
14:10～17:00	口頭研究発表 ①14:10～14:40 ②14:45～15:15 ③15:20～15:50 ④15:55～16:25 ⑤16:30～17:00	教育学部棟

■研究発表について

(1) 発表資格

発表は、本学会会員（申し込み時点で、当該年度までの会費を完納していること）が筆頭発表者として出席することが条件です。共同研究の場合は、今回の弘前大会から、筆頭発表者が会員であれば、そのほかに何名でも発表資格を有する共同研究者として認められます。

(2) 発表時間 30分（発表 20分、質疑 20分）

各研究発表の日時、会場についてはホームページでお知らせします。（1月下旬頃）

(3) 使用機器

発表にパソコンやタブレット等を使用する場合は、各自で持参してください。プロジェクターへの接続は HDMI が基本となります。Mac, iPad 等の接続は各自変換アダプターを用意してください。プロジェクター接続によりパワーポイント等で音声（音声つき動画を含む）を流すことを希望される方は、②演題登録（口頭発表申込）の際に登録フォームの専用欄からその旨をお伝えください。

■会場までのアクセス

- ・弘前大会の会場へのアクセスは、「弘前大学文京町キャンパス」で検索してください。
- ・懇親会場は、JR 弘前駅中央口徒歩1分の「アートホテル弘前シティ」です。

■来場者へのお願い

- ・本大会は弘前コンベンション協会の MICE 助成金へ申請しています。県外からの参加者の延べ宿泊数が 100～299 人で 30 万円以内、300～499 人で 50 万円以内の助成が行われます。宿泊をされる方は、可能な限り、青森県内の宿泊施設をご利用いただきますようお願い申し上げます。
- ・近隣の宿泊施設の混雑が予想されます。発表スケジュール公開予定日を待たず、お早めの予約をお勧めします。

●弘前大会 web サイトは公開次第、美術科教育学会メーリングリスト並びに美術科教育学会ホームページにてアクセス先をお知らせします。今後、新たな情報や追加の募集をお届けする可能性があります。

【第46回弘前大会に関するお問い合わせ】 実行委員会事務局 E-Mail : hirosaki2024.jaaed@gmail.com

第1回理事会報告

Report on the First Board of Directors Meeting

本部事務局 相田隆司（東京学芸大学）

○美術科教育学会 2023（令和5）年度第1回理事会報告

2023（令和5）年度第1回理事会は、2023年9月10日（日）15時05分から、東京新宿区の武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス504教室を会場に、対面とオンライン（ZOOM）によるハイブリッド形式（対面参加の理事はPC持参）で開催された。理事会冒頭、直江俊雄代表理事から開会挨拶が行われた。本会には、対面出席した理事が13名、オンライン出席した理事が6名、合計19名が出席し、理事会成立条件が満たされていることが確認された。また、本会には、第45回兵庫大会実行委員長勅使河原君江氏、同実行委員大西洋史氏、第46回弘前大会実行委員長佐藤絵里子氏がオンラインにより同席した。

<第1回理事会>

日時：2023年9月10日（日）15:05-18:00 場所：武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス大学504教室
形式：ZOOMによるオンライン、対面のハイブリッド形式

審議事項

I 【総務部関連】

1. 第45回美術科教育学会兵庫大会の収支決算報告について

第45回兵庫大会の大会実行委員長である勅使河原氏、同実行委員の大西氏から資料に基づき大会の収支決算報告につき説明があった。審議の結果、原案通り異議なく承認された。

2. 第46回弘前大会の実施について

第46回美術科教育学会弘前大会について、大会実行委員長である佐藤氏より資料に基づき概要・進捗の報告と提案に基づく協議がなされた（弘前大会についてのご案内は本学会通信掲載の二次案内を参照ください）。主な協議事項は、①開催形式、②トークイベントの観覧チケット（非学会員用）の設定について等であった。①開催形式については、対面形式にて実施する方向で異議なく了承された。協議のなかで、大会中止や開催形式変更が必要となる際の対応の必要性について理事から意見があり、総務部と大会実行委員長による対応についての検討の機会が確保されることとなった。②トークイベントの観覧チケットの設定については、原案通り異議なく了承された。

3. 2023年度第2回理事会・総会の開催時期（案）について

相田隆司副代表理事より、2023年度第2回理事会、研究部会議、叢書企画編集委員会、並びに総会の開催時期（案）が提案と説明があり、原案通り異議なく承認された。2023年度第2回理事会は、2024年2月下旬（第2回理事会）と3月下旬（第3回理事会）の2回、オンラインにて開催される予定となった。予定では、第2回理事会において、決算予算以外の審議、「美術教育学」賞審議が、第3回理事会において、予算・決算の審議を行う。なお、総会については、2024年4月初旬～中旬の間に電子メールによる審議が開催される予定とされた。

4. 新入会員及び退会者の承認について

相田副代表理事より資料をもとに、新入会員申込者26名（うち学生会員による申込者は8名）、退会・退会予定者6名について提示・説明がなされ、審議の結果、原案通り承認された。

5. 第47回岡山大会の実施について

赤木里香子理事より、第47回美術科教育学会岡山大会について、候補となる開催日、開催場所、実行委員、開催方法、開催までのスケジュールの概要につき資料をもとに説明がなされ、審議の結果異議なく了承された。

6. その他 なし

II 研究部関連

1. 学会誌第45号の査読体制について

大泉義一副代表理事より、美術科教育学会誌第45号の査読者について、資料をもとに提案がなされ、審議の結果異議なく了承された。

2. 学会誌について

(1) 美術科教育学会誌『美術教育学』のJ-STAGE 登載に向けて

竹内晋平理事より、美術科教育学会誌『美術教育学』、第42号、第43号、第44号のJ-STAGE 登載に向けた業務の委託等について資料をもとに提案があった。審議の結果、業務委託業者選定、業務委託に向けたスケジュール、J-STAGE 搭載予定時期につき原案通り異議なく了承された。その後、今後発行予定の第45号のJ-STAGE 搭載時期に関する意見交換が行われ、今後研究部で他学会の動向も調査したうえで、次回理事会での審議を目指して検討を行うことが確認された。

(2) 共同執筆・共同発表に係る大会発表規則の改訂について

大泉副代表理事より学会誌に関する検討事項として、共同執筆・共同発表に係る「大会発表規則」の改訂について提案があった。提案理由は、学会誌投稿、学会発表に関わる機会を若手に提供していくため、昨今の学際的研究の増加に係る状況に対応していくためである。審議の結果、原案通り異議なく了承された。改定は下記に示すとおりである。また、本件に関連して学会誌投稿規則の改定について意見交換が行われ、研究部によって審議が継続されることとなった。

<記>

大会発表規則

【現行】第3章第7条

大会発表の申込みは、原則として、本学会会員(以下、会員という。)に限る。但し、共同研究の場合は、筆頭発表者が会員であり、かつ会員でない者が発表者の半数を超えないものとする。

【改定後】第3章第7条

大会発表の申込みは、原則として、本学会会員(以下、会員という。)に限る。但し、共同研究の場合は、筆頭発表者が会員であること。

(3) 学会誌の引用表記について(継続審議)

大泉副代表理事より、学会誌の引用表記について提案(継続審議)がなされた。本件は、第13回造形芸術教育協議会(令和5(2023)年3月11日)において協議された「造形芸術教育協議会を構成する三学会による共同事業」に関連する「学会誌投稿論文規程等の共通化」についての協議を受けてなされたものである。APA方式等、引用表記の方法に関する学会誌編集委員会での検討結果も含めて提示がなされ、審議の結果、引き続き審議検討を進めていくことが了承された。

(4) 学会誌投稿チェックリストについて(継続審議)

大泉副代表理事より、学会誌投稿チェックリスト(案)について提案(継続審議)がなされた。本件は、学会誌原稿の投稿時の不備により編集作業に影響が出てしまうことに対する対応の一環である。審議の結果、引き続き審議検討を進めていくことが了承された。

3. その他 なし

III【事業部関連】

1. InSEA 学会発表支援事業

中村和世理事より、昨年度第2回理事会で承認された、本学会会員によるInSEA学会発表支援事業の開始に向けた検討結果について資料をもとに提案がなされた。提案は、(1)美術科教育学会 InSEA 学会発表支援事業規程(美術科教育学会 InSEA 学会発表支援事業申請書(別紙様式1)を含む)について、(2)美術科教育学会 InSEA 学会発表支援事業募集要項、について、(3)審査方法についての3点についてである。審議において理事からは、申請資格に関する意見、大会プロシーディングの扱いに関する意見等があった。審議の結果、提案(1)(2)(3)とも異議なく承認された。

2. 後援依頼申請について(三澤)

三澤一実副代表理事より、学会後援名義申請について資料をもとに提案がなされた。審議の結果異議なく承認された。

3. その他 なし

IV【その他】なし

報告事項

I【総務部関連】

1. 会費納入状況について

本部事務局より会費納入状況と会費減免措置申請状況について報告があり以下の内容が確認された。
会費納入状況：正会員625名、学生会員(大学院生)17名、賛助会員4団体(2023年8月31日現在)、2023年度入金率79%

2. 学会HP保守・サポート業務の移管について

手塚千尋理事より、資料をもとに2023年10月より学会HPの保守・サポートが(株)オープンソー

ス・ワークショップへの委託となる旨の報告があった。

3. その他 なし

II 【研究部関連】

1. 『美術教育学-美術科教育学会誌』第45号の投稿状況・今後の日程について

大泉副代表理事より学会誌第45号の投稿状況・今後の日程につき報告がなされた

2. 令和5年度(2024年3月発表)第21回『美術教育学』賞選考について

大泉副代表理事より、第21回『美術教育学』賞選考について、選考委員等、今後の日程概要等につき報告がなされた。

3. 2023年度 JJCoSPA 投稿論文査読について

宇田秀士理事より、教科教育学コンソーシアムジャーナル第2巻の刊行について、教科教育学コンソーシアムジャーナルの編集規程等について報告がなされた。

4. その他 なし

III 【事業部関連】

1. 学会大会への InSEA への後援申請・美術科教育学会年次大会の国際大会化構想について

中村理事、直江代表理事より、今後の美術科教育学会大会開催に際し InSEA への後援申請を行っていくことが報告された。

2. 今後の学習指導要領改訂への対応 行政と学会との対話的関係の形成について

三澤副代表理事より、まず現在行われている8団体連携の協議の進捗について、2023年6月18日(日)実施の協議内容につき今後公開の予定であることが報告された。また、10月1日(日)に予定されている次回協議においては、行政への提言の方法、他団体に等による提言の具体例についてヒヤリングを行う。そのうえで、各団体の特色を生かした提言等を取りまとめながら、改訂への対応、行政との関係の形成の在り方についても検討していく旨の報告がなされた。

3. リサーチフォーラムについて

三澤副代表理事、手塚理事より、2023年7月8日(土)明治学院大学にて実施された、「2023年度美術科教育学会リサーチフォーラム in 東京 映画『手でふれてみる世界』上映会+岡野晃子監督×大内進氏・茂木一司氏クロストーク「ふれる」がひらくインクルーシブな学びの可能性」につきその概要の報告がなされた。

4. その他 なし

IV 【叢書企画編集委員会】

1. 叢書について

佐藤賢司理事より、叢書企画編集委員会について資料をもとに報告がなされた。まず、委員会の活動については、叢書第4号については、2019-2021年度委員会が編集業務を継続して行い、第5号企画編集より2022-2024年度委員が担当する旨報告があった。また、本年度8月までの叢書販売実績、叢書電子書籍リフロー型への変更について、叢書第4号、叢書第5号の進捗状況等につき報告がなされた。

V 【その他】

1. 学会通信新企画について(審議事項)

直江代表理事より、現在代表理事、副代表理事が執筆を担当している学会通信の巻頭言とは別に、理事各位による特集記事の執筆が提案され、異議なく了承された。



【第1回理事会の様子 於：武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス】

(以上)

新刊案内 Announcement of the New Book

著者：平野智紀 発行：あいり出版，2023年7月（初版），ISBN 978-4-86555-111-2

鑑賞のファシリテーション～深い対話を引き出すアート・コミュニケーションに向けて～

北野 諒（京都文教大学）

1. 本書の背景

対話型鑑賞とは何か。本学会においては用語の意味からあらためて説明する必要はないかと思われる——が、もう少し踏み込んで「その来歴および現状と課題を述べよ」と言われると、途端に筆が重くなるワードでもあるのではないだろうか。昨年、東京国立博物館にて開催されたフォーラム「対話型鑑賞のこれまでとこれから」においても、対話型鑑賞の流行に十分な理解が伴っていないことが懸念されていた。ラフな言い方を許してもらえれば、「何となくは知っているし、それらしいことを体験したこともあるけど、具体的な理論や方法論と言われると……」くらいの理解度で、流行というよりも怪しげな実践が「横行」している感が否めないのが対話型鑑賞の現状である。

なぜそうなってしまったか。そこには複数の事象や事由が絡まりあっているのだが、「日本の状況をふまえつつ理論的背景や実践方法論を総合的にまとめた基礎文献」が、これまで書かれていなかったことも障害のひとつになっていたのかもしれない。もちろん本学会誌においても、2000年代なかば以降、対話型鑑賞に関する論文は継続的に掲載されており、一定の蓄積がある。しかし、個別の論題に限らずに網羅的に知見が整理され、そのうえで体系的な探求が行われている記述の厚みをもった文献——これはやはり見当たらないのが実状だろう。そのような状況下、待ち望まれた一冊として刊行されたのが、本書『鑑賞のファシリテーション ～深い対話を引き出すアート・コミュニケーションに向けて～』である。



2. 各章の概要

本書は、著者である平野智紀氏が東京大学大学院学際情報学府に提出した博士論文がもとになっている。博論ベースの著作であるからして、第1章「対話型鑑賞の現状と課題」にまとめられた先行研究の調査には申し分のない広さと深さがある。多くの研究者が「あったら良いのにな」と思っていたであろう、「対話型鑑賞研究のための地図」が、ようやくここで描かれたというわけである。

そしてもちろん、本書の意義は「手際のよい先行研究の整理」に留まるものではない。本書の白眉は2つのリサーチクエスチョン「鑑賞者は、視覚形態と情緒的内容を組み合わせた高次のファシリテーションをどのように行っているのか」「ナビゲイターは、作品に関する美術史的情報をどのように鑑賞の場に導入しているのか」に基づく、次章以降の探求にある。

まず第2章「深い対話を引き出すための視座」では、「美術鑑賞を、学習科学における『知識構築』の視点から捉えること」が提案され、教育工学や学習科学の知見が積極的に導入される。慣れない語彙や議論に戸惑いを覚える向きもあるかもしれないが、関連諸学のあわいに存立する美術教育学においては、本章での学際的な記述はむしろひとつのロールモデルになるものであるとも言えるだろう。私見では、異なる領域の学知をコネクトする2章の行論によってこそ、本書の独自性・創造性が開かれているように思われる。

続く第3・4章は、それぞれ「鑑賞者同士のファシリテーション」・「美術史的情報の導入」と題され、リサーチクエスチョンを解明する「実証研究」として、対話型鑑賞における発話の分析およびナビゲイターへのインタビュー調査が行われている。かなりテクニカルな内容であり、ここでその詳細に触れることは叶わない。ぜひ実際に手に取って、「ここまでの解像度で対話を捉えるのか」と考察の道程をなぞりながら体感していただきたいところだ。

ちなみに、自戒の念を込めて白状すれば、かつて某書の「たった3つの問いかけで、授業が変わる！子どもがのびる！」という帯文を書いたのは筆者（北野）である。しかし無論、対話型鑑賞は3つの問いかけだけで構成されているものではなく、そこでは複雑な思考や方略が精妙に作動している。3章・4章の議論は「3つの問いかけ」の呪縛を晴らし、より豊穡な対話と鑑賞の場に私たちを誘ってくれるものである。

終章となる第5章「結論：鑑賞のファシリテーション」では、これまでの議論が総括され「対話型鑑賞において知識構築を促すファシリテーション」とは何なのか、その内実がついに示される。本書の結論部分であるので、ここでの半端な要約は控えさせていただこう。ただ、少しだけ予告的に感想めいたことを付言しておけば、本書の結論そのものは比較的穏当なものである。おそらく、対話型鑑賞の実践・研究に長く携わってきた読者であれば、違和感なく納得できるものだろう。逆に言えば、これまでの見方を大きく刷新するような、新奇性のある結論ではない。本書はむしろ、結論という一皿が完成するまでの、検証や考察の丁寧な仕込みこそが読まれるべきである。性急に結論のみを取り出すと、ほんらいの滋味を損なうことになる——これは対話型鑑賞の在り方とも同様であろう。ぜひ多くの方に、時間をかけて本書を味わっていただければ幸いである。

3. 深読み

さて、一般的な意味での「新刊案内」はいったん一区切りとして、最後に少し異なる角度から読解を試みたい。ここからは、良かれ悪しかれ筆者（北野）による「深読み」の部分があることを断っておく。本稿では「本書の独自性・創造性」を示唆しつつも、「新奇性のある結論ではない」とする、いっけん矛盾するふたつの指摘を行った。これはつまり、結論だけをみても本書の達成は明視できない、ということである。

本書は、「知識はそもそも社会的なものである」と捉える知識構築の理論に依拠することで、ナビゲーターのみならず「鑑賞者同士で協調的に行うファシリテーションも含めた形で」鑑賞の様態を描写するものであった。その論理展開があまりに自然かつ妥当なものであるため、ややもすると目が滑ってしまうが、実はここに本書の核心／革新があるのではないだろうか。そしてそれは最初から本書のタイトルにも示されているように思えるのだが、多くの読者は当たり障りのない書名として読み飛ばしてはいまいか？

本書は「鑑賞のファシリテーション」と題されている。鑑賞者の、でもなく、ナビゲーターの、でもなければ、作品の、でもない。鑑賞とは、その3者のあいだで生起する現象である。つまり「鑑賞の」という言葉には、**非人称的な分かれ持たれたファシリテーション**が含意されているのではないか。本書では、ナビゲーターが行っていた支援が鑑賞者に「移譲」されていく、という表現がなされている。また、知識構築の素材として導入される美術史的情報を「鑑賞の場に存在しない他者の発話」とみなす本書の議論は、作品の背後にある文脈／いる他者をナビゲーターや鑑賞者へ部分的に「移譲」していくプロセスとしても読むことができる。

鑑賞者・作品・ナビゲーターの**3者間の移譲のパスワーク**としての**鑑賞・対話・ファシリテーション**——ここでは主体と客体を固定化して働きかけを「する／される」だけではなく、集団がある状態に「なる」という機序が問われることになるだろう。ファシリテーションを「する／される」から、「なる」ファシリテーションへのパスを通すことで開かれる新たな思考の可能性、それこそが「本書の独自性・創造性」である。

ところで、平野氏によるファシリテーションを体験したことがある読者の方は、どれくらいおられるだろうか。平野氏は内田洋行教育総合研究所で勤務する傍ら各地の美術館やアートプロジェクトで、対話型鑑賞ワークショップの実践やそれを通じた人材育成を行ってこられた。様々な機会・場面で、氏のファシリテーションに触れたことがある方も少なからずおられるのではないだろうか。筆者（北野）も、たびたび研究や実践に共同で取り組ませていただけてきた。

実は上述した「なる」ファシリテーションは、氏のワークショップに参加すると、身体的な直感として味わうことができる。平野氏は、このうえなく的確に参加者の発言や意図を整理し、何気ない素振りで端的にパラフレーズして鑑賞の現在地を示してくれる（その背後にはほとんどアクロバットのようなバランス感覚がある）。パスの比喻で言えば、誰もがそのパスを受けたくなるような絶妙なスペースにいつでもボールが転がり込んでくる。いや、確かに直前にパスを出したのは平野氏かもしれない。しかし、そのときそのスペースと位置関係と球運びをそうならしめたのは、私たちプレイヤーの総体である——そのような感覚が、氏のファシリテーションによって不思議と瞬間的に了解されるのだ。

そうして私たちは、またパスを継ぎ始める。本書は対話型鑑賞研究の基礎文献たりうるものと筆者（北野）は考えるが、基礎文献の存在は學術共同体によってそれこそ非人称的に彫琢されてゆくものである。本書が永く読み継がれることを願い、ここで筆を擱くことにする。

■ 学生会員制度の導入と大学院生等への会費減額措置の廃止について

学生会員制度が開始されました。学生会員は、学部・大学院の正規課程に在籍する学生が対象で、在職の有無は問いません。ただし、聴講生、研究生、科目等履修生は対象外となります。年会費 500 円で、学会誌の受領と論文投稿の資格を有する（学部生は除く）会員となります。

詳しくは、<https://www.artedu.jp/jaaed/nyukai> をご覧ください。なお、学生会員制度の導入に伴い、会費減額措置の制度を廃止しました。

■ 2023 会計年度までの会費納入をお願いします

「2023 会計年度会費」は、2023 年 7 月末日までに納入いただくようお願いしています。3 月の大会、リサーチフォーラム、学会誌刊行などの学会運営は、会員の皆様の会費により運営されています。ご自分の各年度の年会費納入状況については、以下の「会員 情報管理システム」にログインすることにより確認が可能です。

<https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/AAE>

なお、納入状況に疑問がある場合には、下記の本部事務局支局アドレスにお問い合わせ下さい。

留意事項

学会誌への投稿並びに大会での口頭発表に際しては、投稿や申込みの時点で以下の 2 つの条件を満たしている必要があります。

- ① 会員登録をしていること
 - ② 当該年度までの年会費を全て納入済みであること。
- * 会費を 2 年間滞納した場合は、会員資格を失います。

会費納入に関するお問い合わせ先：

(株) ガリレオ 東京オフィス 担当者 和久津 君子氏

[窓口アドレス] g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp

■ 会費振り込み口座名・番号

会員の皆様へ送付される振込用紙、郵便局にある払込用紙または銀行等からの振替により下記の口座に納入してください。

- ・銀行名： ゆうちょ銀行
 - ・口座記号番号： 00140-9-551193
 - ・口座名称： 美術科教育学会 本部事務局支局
- 通信欄には、「2022 会計年度会費」等、会費の年度および会員 ID 番号を記入してください。また、ゆうちょ銀行以外の銀行からの振込の受取口座として利用される場合は、下記内容を指定してください。
- ・店名(店番)： 〇一九(ゼロイチキユウ)店(019)
 - ・預金種目： 当座 ・口座番号： 0551193

■ 住所・所属等変更、退会手続き

住所、所属先等に変更のあった方は、すみやかに本部事務局支局までご連絡ください。退会を希望される場合は、電子メールではなく、必ず文書（退会希望日を明記してください）を郵送にて、本部事務局支局宛にお送りください。あわせて、在籍最終年度までの会費納入完了をお願いします。

美術科教育学会 本部事務局支局

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 2 丁目 39-2-401

(株) ガリレオ 学会業務情報化センター 担当 和久津 君子氏

[窓口アドレス] g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp

■ 新入会員

2023 年 3 月 18 日の第 2 回理事会以降、2023 年 8 月 31 日までに入会申込書が受理され、2023 年 9 月 10 日第 1 回理事会で入会が承認された方は下記の通りです（学生会員を含む）。

鈴木 紗代、姉川 明子、加藤 浩司、飯田 菜津美、武内 優記、杉山 聡、宮城 正作、山下 恭平、野島 雅、清水 将大、丸山 松彦、永田 佳之、服部 真也、厚地 朋子、薄井 淳、顔 韻臻、横山 由季、笠井 優、大江 昭子、山口 秋音、加藤 佑奈、謝 雪こう、今村 真帆、菊地 虹、前島 彩見、横田 浩子

■ 学会通信（藤井）

年間 3 回の刊行（6 月、10 月、2 月頃）を予定しています（No. 105 より、ペーパーレス発行に移行しました。希望者に対する紙媒体送付は、No. 106 をもって終了しています）。紙面には、学会からのお知らせのほか、会員の皆様からの原稿を随時掲載します。寄稿のご希望があれば、発行日の 2 か月前までにお知らせください。

■ リサーチフォーラム（三澤）

リサーチフォーラムは学会主催として、研究発表・シンポジウムを実施する場です。募集等詳しくは学会ウェブサイト <http://www.artedu.jp/> のメニュー「リサーチフォーラム」をご覧ください。

■ ウェブ（手塚）

学会ウェブサイト <http://www.artedu.jp/> には、随時、学会からのお知らせを掲載しています。研究会の開催告知等の掲載を希望される場合は、本部事務局までお知らせください。

■ 一斉配信メール

年 3 回刊行される学会通信が公開された際に一斉配信メールにてお知らせします。g030aae-galileo@ml.gakkai.ne.jp より配信しますので、受信できるよう設定を再確認いただきますようお願いいたします。また、必要に応じて学会通信ではカバーできない案内をお伝えしていきます。一斉配信メールは、状況に合わせて柔軟に配信します。

■ 美術教育学叢書について

美術科教育学会編集発行の『美術教育学叢書』の 1・2 号の Kindle 版について、本年 6 月より、従来の PDF 画面から、より見やすい「リフロー型」に変更いたしました。3 号以降も、電子書籍化の際はリフロー型とします。

(以上)

美術科教育学会 本部事務局

The Japanese Association of Art Education's
Secretariat



- 〒305-8574 茨城県つくば市天王台1丁目1-1 筑波大学芸術系
直江俊雄（代表理事/教科教育学コンソーシアム理事）naoe@geijutsu.tsukuba.ac.jp
吉田奈穂子（本部事務局員/会員名簿）yoshida.nahoko.gn@u.tsukuba.ac.jp

- 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学
相田隆司（総務担当副代表理事/本部事務局長/庶務・会計・規約）t-aida@u-gakugei.ac.jp

- 〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2 群馬大学
郡司明子（本部事務局理事/会費管理）gunji@gunma-u.ac.jp

- 〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37 明治学院大学
手塚千尋（本部事務局理事/ウェブ）tetsuka@psy.meijigakuin.ac.jp

- 〒870-1192 大分県大分市大字旦野原700番地 大分大学
藤井康子（本部事務局理事/学会通信）fujii-yasuko@oita-u.ac.jp

- 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1丁目6-1 早稲田大学
大泉義一（研究担当副代表理事/学会誌編集委員長）oizumi@waseda.jp

- 〒187-8505 東京都小平市小川町1-736 武蔵野美術大学
三澤一実（事業担当副代表理事/リサーチフォーラム統括/8団体連携会議）kmi@musabi.ac.jp

- 美術科教育学会 本部事務局 支局
- （株）ガリレオ（<https://www.galileo.co.jp/>） 学会業務情報化センター
〒170-0013 東京都豊島区東池袋2丁目39-2-401
（担当者 和久津君子） TEL 03-5981-9824 FAX 03-5981-9852